

## ＜早稲田の本棚から＞

### 「新着図書」の書架で見つけた一冊

小西 由利子（利用者支援課）



ある日の「新着図書」@中央図書館

2019年4月、中央図書館のリニューアルオープンに伴い、入館ゲートを入ってすぐ左手のコモンズ2側に、「新着図書」の書架が出来ました。多くの利用者が行き来する、目につきやすい場所で、足を止めて新着図書を眺めたり、手に取ったりしている利用者を目にするのもしばしばあります。最近では量も増え、入れ替えの頻度も高くなっているので、新着図書を楽しみにしている利用者も少なくないのではないのでしょうか。実は私自身も楽しみにしている一人で、書架の内容の入れ替わりに気付くと、眺めに行き、気になった図書は借りてみることもあります。

今回、ここで紹介する図書も、そんな「新着図書」の書架から見つけた1冊で、「彼岸の図書館」<sup>1)</sup>というタイトルです。選んだ理由は、単純に、最もタイトルが気になったからです。「彼岸の図書館」は、都会で生活していた古代地中海研究者の夫と大学図書館司書の妻が、人口わずか1700人の奈良県東吉野村に移住し、自宅の居間に自らの蔵書を元に私設図書館を開設する実話です。夫妻が移住を決意してから、この「人文系私設図書館ルチャ・リブロ」を立ち上げる経緯や、「土着人類学研究会」を開催しながら、現代社会の価値観に縛られない「異界」としての知の拠点を構築していくまでの「社会実験」の様子などが、さまざまな関係者との12の対話とエッセイで綴ら

れており、全体を通じて「闊う移住本」とも言える内容です。訪れる人たちとの対話を重ねるうち、「ルチャ・リブロ」は単なる私設図書館の枠を超え、山村における人文知の拠点へと発展していくのですが、その全てのエピソードから、30代という若さで移住を決めた夫婦の率直な考えや図書館に対する強い想いがリアルに伝わってきました。また、人口減少や都会への一極集中などの問題が深刻になっている日本において、現代を生きる私たちが生き延びていくために考えておきたいことや型にはまらない生活の選択肢を提示してくれる本であると思いました。そして、気になっていたタイトルについて、なぜ“彼岸”の図書館なのかについても腑に落ちます。気になった方はぜひ書架へ行って手に取ってみてください。

「新着図書」の書架の魅力は、さまざまな分野の新しい未知の図書が一覧で見られることだと思います。この「彼岸の図書館」との出会いのように、何気なく立ち寄ったことで思いがけない素敵な出会いをすることもあります。これからも「新着図書」の書架で、未知の本に出会えることを楽しみにしています。

#### 【注】

1) 『彼岸の図書館—ぼくたちの「移住」のかたち』青木真兵・海青子。夕書房、2019.10